

Happy Easter !

田 淵 結

4月、あれだけ寒く雪の多かった冬がついに過ぎ去り、自然の息吹、生命力を感じさせるときが来ました。これから夏にかけてキャンパスのいたるところで美しい花が咲き誇っていかうとするそのとき開学も新年度のスタート。3月に卒業生を送り出し、寂しさも感じられたキャンパスにも新入生を迎えて、また活気がよみがえっています。そして関西学院にとって根本的な意味をもっているキリスト教でも、春は一番重要な季節、イエス・キリストの死と復活を祝うイースターシーズンです。

北半球のキリスト教国ではむしろイースターが春の訪れを告げる喜びの祝祭として祝われています。

新約聖書福音書によると、十字架にはりつけにされて息を引き取り墓におさめられたイエスが、日曜日の朝早く、墓を破ってよみがえり、たくさんの人々に現れたといえます。そこにはこの出来事が信じられなかった人たちがかなりいたことも記されています。しかし、それから2000年にわたって復活はキリスト教の核心的メッセージであり続けています。とくにキリスト教が世界宗教となるための最大の働きをした使徒パウロも、「月足らずで生まれたような私にも（復活したイエスが）現れた」と語り、もし復活がなければ彼の働きそのもの、そしてキリスト教の信仰そのものが「無駄」であり「空しい」とさえ語ります（コリントの信徒への手紙一 15章）。こうパウロが語るのは、復活が彼の体験されたこと、それがなければ彼の人生はどこかでつまずき、行き詰まってしまっていたという実感ももちながら語っているのです。そして復活のイエスと出会うことによって、今までの生活では考えられない生涯を送ることになり、また彼以後現代に至るまで、多くの人たちに影響を与え続けています。

関西学院での生活、それは知的な学習や研究であると同時に、みなさんの人生の方向性を決めるかもしれない決断を伴うことになるのかもしれない。自分にはまったく不可能だと最初からあきらめてしまっていたこと、自分にはできないと決めてかかっていたこと、無関係だとすませてしまっていたことに対してもう一度立ち向かってゆく第一歩を踏み出させる力、存在を感じる時があるはずですし、そのときみなさん自身が復活と言う事件の意味を体験的に理解されることでしょう。パウロはさらに「希望はわたしたちを欺くことはありません」（ローマの信徒への手紙 5章 5節）と私たちに語りかけています。授業期間中の第一限と第二限の間に各学部で開かれるチャペル・アワーで、ぜひその語りかけに触れ続けてください。

（宗教総主事・大学宗教主事）